

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第953号 平成27年6月25日

至誠惻怛（1）

6月26日は、山田方谷が亡くなった日です。

山田方谷という人は、江戸時代後期に活躍した陽明学者であると同時に、稀代の財政家として敏腕を振るった方ですが、明治時代に入ると表舞台に背を向けるように身を引いてしまいましたので、今ではその名を知らない人は多いと思います。

山田方谷に関しては、沢山の研究資料が出されていますが、本稿では、

- ・野島透著「山田方谷に学ぶ財政改革」
- ・矢吹邦彦著「炎の陽明学—山田方谷伝—」
- ・林田明大著「財務の教科書」

を参考にしながら、山田方谷の人となりを紹介したいと思います。

山田方谷は、1805年（文化2年）、備中高松（現在の岡山県高梁市）の農家の家に生まれます。幼い頃から朱子学、陽明学を学び、やがて、藩主板倉勝職に見出され、25歳の時、名字帯刀を許されるに至ります。その後、京都や江戸に遊学し、佐藤一斎の門に入って佐久間象山等と交遊し、32歳で帰藩すると藩校「有終館」の学頭（校長）を務めます。

当時の備中松山藩は、表高は5万石ですがその内実は2万石足らずという状況でしたから、当然藩の財政は火の車で、返す当てのない借金を繰り返し、その借財は積みり積もって10万両（今のお金に換算すれば約200億円）、その利息は1年に8千両から9千両（約16億円前後）という膨大なものとなっていました。

山田方谷研究家の野島透氏の調査によると、1849年（嘉永2年）の財政収支は、総収入は42,800両ですが、その内定期収入である年貢米は22,000両に過ぎません。一方の総支出は75,800両で、差し引き33,000両の赤字となっています。

総支出に占める年貢米の比率は29%ですから、まさに3割自治を絵に描いたようなものです。しかも、3万両余りの赤字は幕府からの補助金がある訳ではありませんので、全て大阪商人からの借金で辻褃を合わせて来たという訳です。長らく道庁で仕事をして来た身としては、誠に身につまされる思いです。

1849年（嘉永2年）、松山藩を継いだ藩主勝静から元締め兼吟味役を命ぜられ

ます。つまり、松山藩の財務大臣というところですよ。

松山藩の財政改革が成功したのは、一にかかって、農民出身の儒者に過ぎない山田方谷を財政立て直しの責任者に抜擢した藩主勝静の慧眼と決断力にあったといえるでしょう。

山田方谷は、藩主勝静の期待に良く応え、僅か8年で10万両の借金を返済しただけではなく、逆に10万両もの余剰金を抱える黒字藩に大転換させる事に成功します。

山田方谷は、その後50歳の時に藩の参政（総理大臣）を命ぜられており、如何に藩主勝静の信頼が厚かったかが良く分かります。

財政再建という事では、米沢藩の藩主上杉鷹山が有名です。米沢藩15万石には約20万両の借金があり、藩主となった鷹山は1767年（明和4年）藩政改革に取り組みますが、借金を返し終え、約5千両の余剰金を残したのは、改革に取り組んでから100年後の1867年（慶応3年）の事でした。当然、改革をスタートさせた鷹山はこの世にはいません。

これに対して、山田方谷は、10万両の借財を僅か8年で完済し、なおかつ10万両もの余剰金を蓄える事に成功しています。それ故に、山田方谷は上杉鷹山を超える改革者と評価されているのです。

山田方谷は、資本主義経済によって生じた借金は農本主義経済の範疇での節約等ではとても返せないと考え、産業振興や負債整理、藩札刷新、更には教育改革や軍制改革等多岐にわたる改革を断行して行きます。

藩内には旧態依然とした勢力があったにもかかわらず、山田方谷が改革を成功させる事が出来たのは、トップリーダーである藩主の信頼が極めて篤かった事に加え、農本主義経済の下にありながら、商業や流通、金融という手法を使い、金を儲けて借金を返すという、彼の斬新な発想力にあったといえます。

例えば、大阪の蔵屋敷の廃止はその最たるものでしょう。

蔵屋敷というのは、諸大名が現金に換えるための年貢米を一時貯蔵するための米蔵付の屋敷の事をいいます。その屋敷には、蔵役人と称される藩士が配置されており、この蔵屋敷の維持のために年間1千両もの費用が掛かっていたといえます。一方、米の売買は、蔵元という商人に任せきりとなっていたため、商人達の懐だけが膨らむという結果になっていました。しかも、蔵米を現金化する掛屋は両替商を兼ねており、松山藩はこの両替商達から10万両もの莫大な借金を重ねて来たのです。

こうした中、方谷は、藩の財政再建のためには、年貢米は松山藩で管理し、自ら相場を見ながら有利な時に売り、両替商に対しては現金で負債を返済する方式に変えなければならないと考え、それを押し通します。

両替商達の利権の構造にメスを入れようとしたのですから、大変な事ですが、方

谷の腕力と強い意志に対して、蔵元も掛屋も「商いの上前をはねる武士はあまたいるが、方谷のように商いの上を行く武士は知らない」と畏怖の念を持ったようです。

山田方谷の改革を成功に導いたのは、そうした彼の腕力だけではありません。むしろ、彼が私生活から改革の全てにおいて貫いた陽明学の「誠意中心主義」にあったとって良いと思います。

(塾頭 吉田洋一)